

△その136▽
岡山市立オリエント美術館を
今観て想う

米花 稔
（ハ神戸大学名誉教授・福山大学教授）

ちょっとした用件で近くに行つたついでに、岡山市立オリエント美術館に立ちよつた。前に訪ねたこともあって、何気なく入つたのであるが、展示を見るうち、いままさに世界の焦点の地域としてのオリエントの美術品類の背景の自然と歴史の表示に、あらためて強い印象を受けることとなつた。



岡山市立オリエント美術館

想えば世界文明の発祥のひとつであるチグリス、ユーフラテス両河を中心とする地域である。展示説明

岡山市立オリエント美術館

の歴史にはアラビア半島から3世紀にはトルコ、モンゴル民族をまきこみ、トルコ、イラン、インドの鼎立、中国文化ともかかわるなど多様な展開が示される。表示された年表の複雑さからみても、オリエントの歴史の素養のない筆者はここに述べきれない。ともあれ歴史の多様さだけでも今この地域の複雑さがしのばれる。

第二次大戦後一九四八年五月イスラエルの独立宣言に始まる第一次中東戦争から、一九七八年一〇月の第四次中東戦争、それに伴うアラブ諸国による二度のオイル・ショック、一九八〇年九月から国境問題によるイラン・イラク戦争、

そしてこの一九九〇年八月のイラクのクエート侵攻まで、この四〇余年のきびしい展開も、数千年の複雑なこの地域の歴史の延長戦上有るようである。

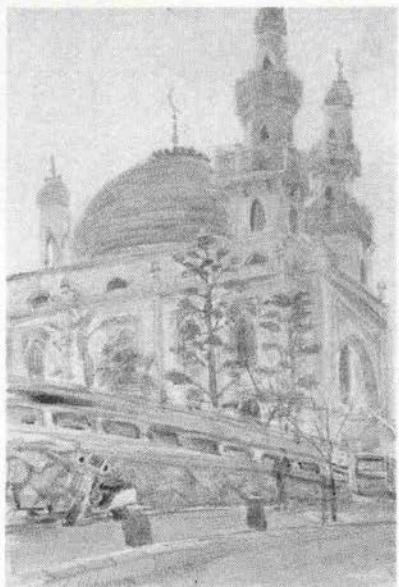
諸展示品より、その背景に想いを見つづける。紀元前三千年ごろに都市国家シュメール文明が生まれ、領土国家の抗争をへて、アッシリア帝国、バビロニア、そして伊朗に興つたアケメネス朝ペルシヤによる統一の実現が紀元前五〇〇年ごろ。ついでマケドニア・ギリシャによるヘレニズム時代、その間紀元前後までエジプト王朝、またローマ勢力の影響などをへて、紀元七世紀にはアラビア半島からのイスラムの時代となる。十二、十三世紀にはトルコ、モンゴル民族をまきこみ、トルコ、イラン、インドの鼎立、中国文化とともにかかわるなど多様な展開が示される。表示された年表の複雑さからみても、オリエントの歴史の素養のない筆者はここに述べきれない。ともあれ歴史の多様さだけでも今この地域の複雑さがしのばれる。

第二次大戦後一九四八年五月イスラエルの独立宣言に始まる第一次中東戦争から、一九七八年一〇月の第四次中東戦争、それに伴うアラブ諸国による二度のオイル・ショック、一九八〇年九月から国境問題によるイラン・イラク戦争、受けたひとときであった。

憎たらしい タミー

〔作家〕

田中千佳
カット／西村 功



この頃、猫ブームである。本屋さんには猫のコナードがあり、かわいい仔猫の表紙の本が並んでいる。その他、猫の模様のハンカチ、ノート、財布、Tシャツなどなど。街中に猫が氾濫している。

トレンディだから猫を飼いたいとか、お洒落に見えるから猫が好きとか聞くと、私は機嫌が悪くなる。そんなの間違っているんじゃない？

私のように本家、元祖、家元、総元締め、会長、総裁の猫好きとしては、軽々しく『猫が好きなんです』なんて言つてほしくない。猫を愛し、一緒に暮すなんて、いい加減な気持では絶対できないのだから。

猫は抱くとほかほかと暖かく、柔らかい。甘い声でミャーと上品に鳴く。時々、こちらの手やほっぺを嘗めてくれる。自分でこまめに体の手入をしているから、いつも清潔だ。猫といふと私はうつとりしてしまう。

小さい時から、猫を飼いたいとずっと思つていた。願いが叶つて、子供達の手が離れた頃、やつと仔猫をもらつた。お目々がまん丸なキジ猫で、きれいな声をしていた。雌だが性格は積極的で、勇敢。頭もシャープだった。

年の暮で、辰（タツ）年と未（ミ）年の境目に来たというのでタミーと名付けた。それ以来、彼女は我が家にいる。もう十四年になる。

かわいい、かわいいという時代は過ぎてしまつた。今はもう、人間も猫も渾然として一体となつてゐる。お互に性格もよく分かり、こうすればこう出る、ああすれば喜ぶ、怒ると知つてゐる。その上、タミーはどうやら日本語が分かるらしい。いけないことをして、私に叱られるとブイと外に出る。寒くても我慢して、じつと夫の帰りを待つてゐる。夜遅く夫が帰つてくると、門のところまで迎えいでて『ニヤゴニヤゴニヤーン』とすり寄つて喋り続ける。

それはもう人間と同じ口調で、言いつけているのだ。『全く、あのママはちょっとしたことでもすぐ怒つてヒステリーなの。この寒いのに私を外へ放り出したりして、意地悪するの。お帰りを待つたわ』というようなことを叫んでいた。そして、夫と一緒に意気揚揚と入つて来る。

『タミーがえらい怒つとったぞ。かわいそうに』夫は全面的にタミーに味方するのだから、頭にくる。一体、妻を何と思っているのかしら。この頃、我が家では夫を挟んで、タミーと私で張りあつているようなところがある。まるで三角関係だ。

夫は毎晩、タミーを膝に乗せて食事をする。タミーは鼻をうごめかせて、おいしそうなものをせびる。『これがいいか？ こっちにするか？ ちよつと待ちなさい』夫は魚を小さくしてタミーに与える。タミーはおいしそうに食べ、満足気に夫を見詰める。

毎晩、目の前でこれをやられると、私はだんだん面白くなくなってくる。私が一生懸命作つたものを、タミーと夫と二人だけで食べている雰囲気なのだ。深く愛し合っているようにも思える。

それで、先日、提案した。『ねえ、タミーをだっこして、御飯食べさせるのを全面的に止めてといつてゐる訳ではないのよ。月水金はタミーでいいわ。その代わり、火木土は私をだっこして食べさせて』

夫はびっくりして、しばらく私を見ていたが『考えておく』と言つた。それから、随分経つのに、色よい返事がない。

『ねえ、どうなつてゐるの。いつから始めるの

？』と迫つてみたら、『ママは重いから』と言う。たつた四十四キロしかないので。私はどうも釈然としない。愛されてないのかなあ、自信がないなってしまった。

先日、私が忙しく働いているのに、タミーは朝からでれつと寝こんでいた。日頃の恨みがあるので、私は毒づいた。『ご主人様が働いているのに、申し訳ないと思わないの。たまには鳥でも取つてきて、今晚、焼き鳥でもどうぞって言つてごらん。本当に何の役にも立たないんだから』

聞えていいのかいなか、タミーは知らん顔で大きな口を開けてあくびをしていた。ところが、夕方、居間に死んだ雀が一羽転がつていて。タミーが取つてきたのだ。よく見えるよう置いた。やつぱり聞えていたのだ。タミーは澄ました顔している。『文句ある？』と開き直つているように思えた。

憎たらしいタミー。でも、いつも何をしても付き合つてくれる。洗濯物を干していると、一緒にベランダにいるし、この原稿を書いていると、同じ椅子に乗つてゐる。意地つぱりで、誇り高いところが大好き。これからもずっと一緒に暮していくようね。

（筆者紹介）本名林陽子。朝鮮京城生まれ。戦後引き揚げ京都に住む。旧制同志社女尊英文科卒。アメリカ系商社に就職。結婚、その後出産のため退社、以来専業主婦。「マイ・ブルー・ヘン」で昭和六十年度中央公論女流文学新人賞を受賞。現在、東灘区在住。



神戸でひらいたスペイン展

永沢 まこと
（イラストレイター）

初めて訪れた土地が好きになると「ここへは必ず又来るチャンスがあるな」と思う。思うと言つては、より念ずると言つた方がいいかも知れない。すると不思議にも本当にそれが実現してしまうということが私には度々あった。

実は神戸がそうだった。

一九八四年と八五年の春、私はたてつづけに「三宮そごう」でニューヨークをテーマにした展覧会をひらく機会を得た。これが神戸を訪れた最初である。なんといい街だろうと思った。私の好きな港があり、水際を歩くことも出来れば、山へ登って一望の海を見渡すことも出来る。街が横に長く、タテに短く、短い方の坂を登つて行く距離感が実にいい。

コーヒーやエスニック料理など私の好物も神戸はとても美味しいことが分かった。何より強く感じたのは、展覧会を通して会った神戸の人々が、ごく自然に自分の街を気に入つておらず、それでいてよくありがちなかたくなな郷土愛みたいなもの

にしばられていないことだった。土地と人との間に風通しのよさがあると言つたらいいだろうか。

「ここへは必ず又来るチャンスがあるな」

と私が思い、念じたのはそのためである。

それ以後、実際は何のチャンスも訪れないまま五年が経とうとしていた。私の「念力」の限度は大体五年なのだ。神戸にはとうとう通じなかつたのかな、と半ばあきらめかけていた今年の夏のことである。

私は宮本美智子との共著で二年間の旅行記を綴つた「スペインの誘惑」という本を草思社から出版したが、そのお祝いということで神戸の展覧会の時知り合つた方から、神戸風月堂のゴーフルが送られてきた。

私は東京小金井のアトリエで、アイスコーヒーを飲みながら、ゴーフルをかじつては猛暑の中の制作に没頭していた。

そこへ関西から一本の長距離電話がかかってきたのである。電話の主は東京出版販売の稻葉常務。

＊ ひらがなで書かれた文章



展がひらかれるに至ったのである。実は海文堂のオーナー島田誠さんと稻葉さんは稻葉さんが東版の神戸支社長時代からの親しい仲だったのだそうだ。島田さんのセンスのいいパブリシティと展示で、展覧会はとてもいいものになった。

島田さんのプロデュースによる、オープニングを兼ねた私と宮本によるトークショーが元町のスペイン・レストラン「ロス・ヒターノス」で催され、これも仲々いいムードで盛り上がった。

私は展覧会とパーティとで、人々たくさんの中戸の人と話すことが出来たが、驚いたことは神戸には海外長期滞在者や留学体験者、海外体験の豊富な人が実際に多いということだった。

展覧会の初日にやってきた青年は、三年をミラノで過してきたばかりだったし、息子さんがマドリードの大学で学んでいるという御夫妻もいた。スペインをレンタカーで四〇〇キロ走ったという豪快な女性にも会った。一家でボルネオに旅をし最近「太郎家族のボルネオ日記」を出版されたばかりの三浦太郎・暁子夫妻も見えた。十五年をオーストリアで暮らし、今息子さんがアメリカに、娘さんが中国にいるという国際人住野昭さんも再会することができた。やはり五年ぶりの再会だった神戸っ子の小泉編集長からはハバロフスクの旅の話を楽しく聞かせてもらつた。

出版業界ではよく知られた論客でもあり、稻葉有のペンネームで小説も書いている方だ。

「永沢さん、突然ですが神戸でスペインの作品展をやる気はありませんか？」元町にとつてもいいギャラリーがあるんですよ」

私は息をのんだ。いや、ゴーフルをのみこんだ。やっぱり念力は通じたのだ。期限ギリギリに通じたのだ。

かくして話はトントン拍子に進み、十月十三日から元町海文堂、ギャラリーで「スペインの誘惑」



（著者紹介）

昭和11年東京生まれ。学習院大学政治学科卒業後、イラストレーターとして活躍。同年に渡米。8年間ニューヨークに在住。また世界各地に旅をし現地の人々の姿を描き続けている。著書に「ノンフィクション・ニューヨーク」「ニューヨーク人間図鑑」（宮本美智子と共著）などがある。

□トランペット片手にブラジル一人歩き△31▽



僕とマリアの 国際結婚

絵と文 右近 雅夫 ▲在ブラジル・サンパウロ▽

最近サンパウロの邦字新聞を読むと、日本の農村で適齢期の娘が不足しており、農家の子弟と東南アジア諸国の女性と見合いさせ、国際結婚させたという記事がのっていた。大部分がフィリピンやタイ国出身の女性らしいが、言語風習が異なり封建的な日本の農村に嫁いで行つた花嫁の苦労は大変な事だろうと思う。ブラジルでは最近の統計によると、移住者の子孫の40パーセントも日系人が非日系人と結婚しているそうだが、日本の農村の場合と周囲の環境も違うし事態は異なる。処でそういう自分もボルトガル系の家内と結婚して十七年、国際結婚組の一人なのだが、来年は僕らが知り合って二十五周年になるので、昔のアミゴを招いてフェスタをやろうと二人で話していたところだ。僕とマリアが女子大生のパーティで知り合ってから結婚する迄七年もかかったのも、家内がブラジル人だからというので親や妹達の反対が激しく、そのほとばりが覚める迄非常な日数を要したからである。僕の両親にしてみれば長男の僕が日系人の金持ちの娘とでも結婚してくれればと心の底で思っていたのであろうが、僕は恋の方を

第一に選んでしまった。僕とマリアが結婚した当時は、工場の経営が苦しかった時代で、「白い結婚衣裳は後で何の役にも立たないから……」と言つてマリアは普通のドレスで式を挙げた。家内の母親が長年病気を患つていたので式も教会でやらず、マリアが学生時代恩師だったパドレを家に招いてミサをやつてもらつた。披露宴の方も親戚とごく親しい友達だけを近くのレストランで招いて昼食をしたが、この方の費用は家内の妹のアンナと弟のフランシスコが僅かな貯金をはたいて払ってくれた。今から思えば随分質素な僕らの結婚式だったが、日本から思いがけないお客様さんが参加され忘れ得ぬ想い出となつた。丁度式の前夜、リオで国際歌謡フェスティヴァルが催され、テレビに日本代表の審査員としてジャズ評論家の油井正一氏の姿が大きくクローズ・アップされたのを見て僕は驚いた。早速テレビ局に問い合わせると、滞在されているリオのホテルを教えてくれたので、翌朝一番に電話をかけた。「油井先生、実は僕今日結婚するので、結婚式に御招待したいのですが……」と言うと、先生は他の約束をキャンセ



ルされ、リオから飛んで来られた。その夜僕は“Capitú”というライヴハウスで演奏する事になっていたのだが、僕の代りに演奏を頼んだアミゴのトランペッター、ロバートに油井先生の事を頼んでおいて、僕はヴァリアンテのペルアにマリアを乗せるとサントスに向かハネムーンの旅に出た。新婚旅行にはサンパウロからなら、お隣りのパラグアイかアルゼンチンを選ぶのが普通で、それもせめて一週間位の日程をかけて行くべきなのが、当時の僕らにはそんな金も時間もなかつた。ただ、二人が一緒にになれただけで僕もマリアも満足だった。僕らが結婚したのは木曜日で、翌日、丸一日をガルジヤの海岸で過ごすと、土曜の朝にはサンパウロに向か出発しなければならなかつた。午後一時からサンパウロ近代美術館のホールで催されたジャズ・コンサートに出演のためだつた。オープンの“Sing, Sing, Sing”を演奏

し終えまだ拍手の止まぬ内に司会役のフェルナンドが、「新婚早々、一日半のトランペッター、マサオのために次の曲は “I can't believe that you are in love with me”……」ヒアナウンス、会場は割れる様な拍手で僕はステージの真下に坐つていたマリアに投げキスをすると感情を込めて吹き始めた。

僕らの結婚生活は一見華やかな国際結婚だが、最初のうちは僕のファミリーの人種偏見に非常に我慢と忍耐を要した。ちゃんとした家庭に育ち、大学教育まで受け、高校の教師をしているマリアが長男の嫁であるに関わらず、外人の女だというだけの事で差別されるのを見るのは僕にとってとても辛い事であった。それでもマリアが僕を大切にしてくれる事を良く知っている母だけは、家内を自分の娘のように可愛いがつてくれた。結婚当初、生活が窮屈だった頃からマリアは自分のドレスは買わなくとも、僕の服装には何時も気を付けてくれた。「ステージで恥をかかないように……」と言つて僕に似合つたものを買って来てくれるので、結婚以来僕は自分で服や靴を買いに行つた事がない。僕は一時ぎっくり腰をやり脊髄を痛めた事があるので、家内と一緒に買い物に行くと、僕に重い物を持たせまいと取り上げるので、女に大きな荷物を持たせると周囲の人から変な目で見られる事がある。親子三人でショッピングを行つての帰途、新車のモンザを運転しながら僕は横のマリアに言つた。「好きな女と結婚する事が出来、僕は本当に幸福な男だ！」車のフロント・グラスには亜熱帯の夕暮をバックにパウリスタ大通りの高層建築のシルエットにネオンが映り、ラジオがムーンライト・セレナーデを奏でていた。

Foreign Affairs'90

シンク・グローバリ―、アク ト・ワーカリーを目指せ！

■出席者

新野 幸次郎

（神戸大学学長）

（六甲牧場株会長）

長島 隆
住野 和子

（神戸YMCAクロスカムデイルチユラル）

'90年の最後をしめくくるテーマは「海外から神戸へ」。ソ連、東欧圏を含めたヨーロッパの新時代の幕開け、湾区諸国での緊張など、いま、地球規模での激変の中で、国際都市KOB Eから海外で活躍する神戸っ子の情報を集めてみた。今回のテーマを括するこの座談会は、日頃、国際交流、留学生問題などの中において、地について行動力で神戸の国際化をすすめるリーダーたちの意見である。

★献身的な国際文化交流を……

——神戸から海外の各地で活躍する神戸っ子たちとの交流について、まず長島さんからお伺いしたいのですが……。

長島 パリ滞在中の現代美術の松谷武利さんとは、神戸地下街（さんちか）と、日本では初めてという「ハイターフ」展を彼の協力を得て開催しましたし、パリ・バルセロナで世界的に活躍するギタリストの鈴木一郎さんの協力を得て、昨年、バルセロナの画家クシヤーさんを招いて「クシヤー展」と、カタルニア地方のピカソ、ゴヤ、

ミロ、ダリなどの独自の個性を持つスペインの伝統文化

を紹介しました。彼等が海外で長年、生活しアーチストと交流したからこそ実現できた国際美術展ですね。又、

ブータンの国王が、天皇の御即位式典に来日されていますが、ユニバーシアードの時、ブータンの選手たちに招待出場してもらつたのです。選手の中には、その後国王の側近となつた者、その他重要な地位で活躍している者もでております。若い世代交流という意味で、ユニバーシアードの国際交流も神戸にとって大きかったです。

住野 私達も選手村で「日報」の編集に協力いたしましたが、世界中の若者が神戸に集つて、若さとパワーに溢れるスポーツを目の前で見せてくれたユニバーシアードの意義は日本人側にとつても大きいですね。その直後、アフリカからの黒人の留学生をホストファミリーと縁組した時、大人たちは、まだ皮膚の色へのこだわりがあつたのに、子供たちはスポーツの祭典を通して「黒人スポーツ選手たちはカッコいい」と嬉しい憧れをもつて接してくれたので、大人の意識の方が時代遅れで反省させられたというお母さんからの話もありました。

新野 アーチストといえば、今、サンパウロの若林和男さんのご子息が本学に留学という形で在学しています。そういう世代なのですね。本学の留学受け入れの目標は

「献身的で」「何の見返りも望まない」体制ですね。

住野 日本へ来る留学生の約九割近くはアジア及び開発途上国からです。そして、こうした留学生を含め在日外

国人の数は急激に増えてきているとはいえ、日本全体の人口に占める割合は〇・八%に過ぎません。現在の世界のどの国(マルチ・カルチャーの国)と比べても異例です。ですから、私たちが本当の意味で国際化するには、こうした多様な価値観や文化をもった外国人と、ふだんの生活の中でもっともっと交流できるようにならなければいけないと思います。共に行動し交流することによってお互いの“違い”が発見できますし、国際化とは“違ひ”の発見からスタートするものだと私は思っています。

もう一つの問題点は日本人社会の中にあるタテの人間関係を日本人が外国人にも使い分け、欧米人に対しては迎合的であるのに、同胞であるアジア人には侮蔑的であることが往往にしてあり、それがアジアの人をひどく傷つけています。

今、私たちは限られた国だけでなく、世界のどの国とも相互依存の関係で共存してゆかねばならないのですから、先ず身近な地域社会の中で人間の顔の見えるつき合いを深めてゆく、つまり“THINK・GLOBAL BODY・ACT・LOCALLY”を目標にしていかなければいけないと思います。

新野 私の大学では今、外国人留学生を約五百二十人抱えています。国全体では、十万人受け入れを目標としています。比較的、海外への目に恵みの神戸としては、留学生受け入れの点でも先鞭をつけたい。神戸には伝統がございますからリードして行かなければなりません。教育界では、「経験は失敗の積み重ねに對して与えられる名である」と言いますが、失敗を恐れではならない。たじろいではありません。

住野 確かに先生のおっしゃる通り、これからは神戸は量的にも質的にも留学生の受け入れ体制をもつと積極的に推し進めていくべきでしょう。



長島 隆さん



住野和子さん



新野幸次郎さん

留学生の中には日本の若者以上に真剣に勉学し、しかも自分たちの異質な価値観を日本の社会に役立てたいと努力して、日本人からも対等の人間として尊敬される人も少なくありません。でも中には親切にされたり甘やかされることが当たり前で、地域社会の一員として自分にできる貢献をしようという努力や謙虚さを持ち合はない留学生も多くなっています。また日本人側も、隣人のアジアの国々への貢献度が低いという引け目からか、留学生たちに、学生としての自覚を促してあげよう、という努力をあまりしていなければないかという危惧を最近強く感じ始めています。

★ 地球人は皆同じ

長島 神戸を訪れた在バンダラディシュのブータン大使を案内したとき、ある日本人から侮蔑的な態度で話しかけられました。

住野 そのため日本はアジアや開発国へのODAの援助額は世界一でありながら、あまり感謝もされていませんね。基本的に「援助」という考え方が欧米と日本では異っているのじやないかという気がいたします。欧米の企業などでは、利益を社会や世界に還元しようとする姿勢が強く、見返りを求めるところなく援助するところが多いのに、日本では「せつかく……してやったのだから、その知識や技術を日本企業の傘の下で生かすべきだ」つまりひもつきの援助ではないかという気がいたします。日本の留学生受け入れ体制にも多かれ少なかれこういう傾向があるのではないかでしょうか。

新野 そういう奉仕の精神は、キリスト教の土壤の中に見付ける事が出来ますね。スペインから来た宣教師達は何の見返りもなく布教に来たと言えます。領土的野心といふのは御案内の通り商人達の利害に絡んだデッチ上げです。こういうボランタリー精神を全て備えた人間は、なかなか居るものではありません。

それでも神戸という街はいい状況にありますね。中華街とか回教寺院があるといった表面上の国際化ばかりではなく、奉仕活動の現状も評価できると思います。

住野 日本ではホストファミリーが留学生数のまだ七割位しか確保できません。それに比べて欧米ではホストファミリーの数が留学生の数を下回ることはあまりないようです。人間の国際交流という点では欧米諸国の方が、ずっと先輩だと言えます。ただ同じ先輩でも、イギリスなどのヨーロッパ人とアメリカ人では国民性の違いがあるようです。よく言われることは「イギリス人はなかなか家には入れない。しかし一旦入れたら帰らない」。逆に「アメリカ人は家には入れるがすぐ追い出す」どちらがいいとは言えませんが、イギリス人は一生かけてつき合うとよく言われます。日本人の場合どちらかといふとイギリス人に似ていて、親しくなるまでは時間がかかりますが、一旦親しくなると外国人でもウチの人になり得て細かい面倒までみられる人が多いですね。

新野 外国人留学生が日本に対し良いイメージを受けて帰るかどうか関心のあるところですね。留学生は住人なのです。日本の衣・食・住という総合環境の中で一定期間暮らして帰るのですから、何らかの印象を持って帰るはずです。来日前に抱いていたイメージと違う場合が当然ながら起こります。しかし、日本の大学では御世話をなったという印象が多いのはよかったです。

住野 私たちの行ったアンケートの結果でも、半分以上が、日本に来てよかったですと思っているようです。そして最近は、日本の大学を卒業して日本の企業へ就職する留学生も増えています。ところが、日本の大学のイメージはいいのですが、会社の評価はあまりよくないです。

ウサギ小屋の悪名高い日本としては奇妙なことに「住居」や「長期休暇」にはまあまあ満足しているのに、「組織の中での異質な特性が生かされない」、「ディスカッションではなく、根回しや裏議でモノゴトが決められてゆく」といった点で異和感や不満を持つ留学生

ん。経済の点では既にある程度の目標には達しています。ある側面では留学生に親切すぎる待遇をしていません。例えば、国費留学生には大学の助手よりも高い手当を与えている。しかし、大事なのはそういう金銭面の事ではないですね。内容を充実しなければならない。

特に語学の充実は急務です。



神戸にも留学生のための施設が増えている

(大半がアジア諸国) が少なくありません。

★語学分野でリードして行きたいこれからの中野

住野 これからは、好むと好まざるとにかくわらざ、異った文化をもつた人たちが共に生きてゆかなければならぬ社会構造になってゆくことでしょう。"LIVING・TOGETHER"というモットーは一見カッコいいですが、言葉の障壁を克服することもさることながら、生理的にもタフネスでなければSURVIVEできませんね。価値観の違いだけでなく、食物やニオイ……などの違いにはしたたかな体力がなければ共生できません。

その点神戸はいい意味で好奇心の強い人が多いから、エスニック料理店や、変った外国のレストランが多いのはいいことです。まずしたたかな胃袋がなければ、異質共生なんて実現しないのではないか。

新野 我が国の教育文化水準、特に語学分野は決して高いとは言えませんね。留学生受け入れの為には、授ける側も、又、日本人学生も語学に堪能でなくてはなりません

——最後に、今、神戸では、エドモンズ大学等、外国人教員を雇う学校が増えつつありますか?……

新野 神戸大学は、従来商社実業界等の尖兵になるべき人材を輩出してきました。今の国際経済状況は、一言で言うと、パックスマーケティングの終焉です。これからは、日本とECが、合衆国の抜けた穴を埋めて行かなければなりません。三極構造になりつつあると言えましょう。

そうなると、当然の事ながら日本への風当たりが強まるでしょう。日本も、これからは神戸にある「合理性」をうまく応用して行かなければなりません。日本が生き延びる為には、厳しい言い方ですが、追従するアジア各国に対し、常に一步以上足をあけておかなければなりません。これからは、範たる日本にならなければなりません。神戸としても、国際交流に、より一層力を注がなければならないと言えるでしょう。我々教育者としましては、語学教員にとどまらず、教授陣の国際化を進めて行きたいと考えております。

Foreign Affairs'90

リガを訪れて

詩人
赤松 徳治



作家同盟の招待によって去る八月七日から九月二十八日まで、ソ連各地を訪れてまいりました。ラトビアには、国民詩人ライニスの生誕百二十五周年記念祭に招かれて一週間滞在しました。

この「詩の祭典」は、毎年九月に催されていますが、今年は節目の年とあって、世界各国からライニスの研究者・翻訳者・詩人が招かれました。

バルト海に注ぐダウガワ河をはさんで広がる首都リガ市は、八百年の歴史が至るところで薫りを放っています。

大通りには、ヨーロッパの気風が漂う高い建物が並び、そのまま横から続く石畳の路地は過去の物語を静けさのうちに語りかけてきます。ゆるやかにうねる小路をたどっていくと、不意に前方が開けて広場にたどりつき、尖塔の大聖堂が現れたりします。かと思うと、「芸術の街」らしく、ギターを弾き語る若者に出会ったり、画廊に行き当つたりします。「公園の中に街がある」とはよく言つたもので、まち中が緑で、花で、公園で、埋まっています。

ユルマラ市は、リガから車で一時間ほど走ったところです。バルト海に面した保養地・別荘地です。松林と白樺に囲まれて、やわらかい陽射しを浴びながら波の音を聞いていると、本当に時間がわからなくなります。ライニスは若い頃、ここで多くの仕事をしたそうです。

リガからユルマラへの道の両側には、防風林の植込みに囲まれて、入念に手入れされた方形の田畠が実に整然と並んでいて、この国の人々の勤勉さが手に取るようにわかりました。琥珀で知られるラトビアですが、海産・農・工業においてもソ連では一頭地を抜いているようですね。

さて、「詩の祭典」の第一日（九日）は、リガのベルマンスク公園の野外音楽堂で小雨の降る中、民族衣裳をつけた女性合唱団のコーラスから始まり、女性国会議員の挨拶、詩人たちによる詩の朗説、外国詩人の挨拶など盛り沢山の行事が続き、夕刊の一面を埋めました。

第二日はユルマラの、海岸近くの公園で、各國語によ

外側にのびる新市街は高層住宅が建ち並び、電機製品や化成製品の工場など、新しい産業が集中して発展しています。ラトビアは、日本の中国地方くらいの面積の国

二次世界大戦では全土が激戦地となり、またスターリン治下の人種政策によって離散を余儀なくされてきました。

重要な地所にありながら、北欧史にも東欧史にも殆ど載らないこの小国の中、国民の精神的支柱としてライニスア・スペーリジア夫妻の記念碑の除幕式が中央通りで行われました。また、第三日はリガで、ライニス像を前にした

廣場で、市長の挨拶や各国の文学学者・研究者などの賛辞が述べられ、熱い雰囲気を醸し出していました。

リガでは、日本語の勉強もすすめられていて、成人クラスはカツタイ先生が、小中学生対象の初級クラスはブリギッタさんが、熱心に教えていました。が、何分にも教材が少く、神戸からの支援が望されます。

リガを去る最後の日（十三日）姉妹都市から来た者の誼で、ブレーメンの文学学者と私は特別に市長に謁見する機会を与えられました。席上、今話題のバルト三国の独立問題に話が触れましたが、「血を流さないこと、急がない、ゆっくり前進する」というのが市長の言葉でした。歴史の重みと、自信にみちた言葉でした。

るライニスの訳詩の朗読が行われ、午後からはライニス・ア・スペーリジア夫妻の記念碑の除幕式が中央通りで行われました。また、第三日はリガで、ライニス像を前にした廣場で、市長の挨拶や各国の文学学者・研究者などの賛辞が述べられ、熱い雰囲気を醸し出していました。

いずれも合唱団によって数多くの歌がうたわれ、マイクを通して言葉が流れ、数百・数千の人たちが、小雨の中、傘をさしたまま（二時間ほどでしたが）老いも若きも最後まで立ち去らず、傾聴し、拍手する、熱い集会でした。

言葉の重み・言葉の力、というものを、民族の命運を担う言葉・詩の呪力を改めて知らされました。

天津・大連・旅順をユーラシア大陸の東南部の出入口とするなら、バルト三国は北西の玄関口として重要な地位であることから絶えず列強に狙われ、従属下に置かれてきました。実際に人口の37%を失う犠牲のうえで、一九二〇年によくやく独立を果たしますが、それも束の間、第



ライニスの詩の朗読会



リガの街並み

Foreign Affairs'90

旅の途中で

造形作家

植松奎二



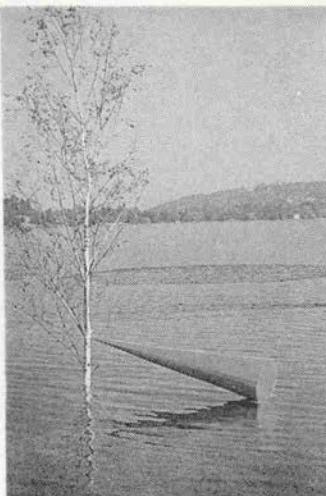
面をみて、もうすでに円錐はつくなっている。樹は用意出来ていると聞いて、もう半分以上出来ている、これは楽だと思った。

今も旅をしている。もう長い旅だと云えるだろう。一九七五年に一年か二年のつもりでドイツにやってきて早いもので十五年たった。今はデュッセルドルフにも住んでいるし、香櫞園にも住んでいる。どちらにも日本に帰る、ドイツに帰るといつて。今も一ヶ月半程のドイツ滞在である。この頃は特別に観光旅行という感じでヨーロッパを旅行することはなくなつた。どこかに行くとしたら僕の個展があるかグループ展があるときである。ついこの間、北イタリアのモナテ湖を行つてきた。この辺はアルプスの清浄な水をたたえる湖水地帯である。近くにはマツジョーレ湖、コモ湖など美しい湖が散らばっている。避暑地であり、別荘地である。ここで ART-ELAGO '90なる野外彫刻の国際展があつて、それに招待されたのである。世界十カ国から招かれた作家は二十人、すべてのアーティストが湖の中に浮くものか、湖畔に現地で直接彫刻をつくるのである。主催者側が用意してくれたマテリアルでもつくるのである。アーティストがつかうマテリアルはエコロジカルマテリアルと決められている。僕は自然の樹と木材を使つた。出発の一週間前電話を入れると僕が送つたマテリアルのリストと因

小さな田舎、村といったところに事務局があつた。すぐ打合せ、僕の場所を聞いて、明日から仕事にかかることにする。あくる朝、僕の場所で材料がくるのを一時間、一時間半待つてもこない。TELをしても通じない。あーイタリアだなと思つてしまふ。この展覧会も一年のびてゐるのだ、郵便事情も悪く、いつも連絡がうまくいっていないなかつた。結局僕の場所がかわっていて、事務局がうつかりしていたのだ。僕の場所に行つてみると、木で出来ているはずの円錐は全然なくて、板があるだけだった。トンカチ、クギ、ノコギリ、ボンドといった道具類もなし、また一時間程たつて、アシスタントと道具がくる。僕のアシスタントをしてくれたのはマキシモという青年で普通のときは水泳教室の教師をしているという。ものすごく気持のいい青年、他の作家も芸術大学の学生がアシスタントについたり事務局に働いている人やテクニカルアシスタントの人々すべてがボランティアでこの展覧会を成功させようとしている。シモネティ

ーという女性が企画者で、彼女は作家兼村の画廊主といふところ。彼女の夫もアトミックセンターの科学者で、休暇をとつて手伝つてゐる。二十人程のアーティストが同時に作品をつくり出すのだから、大変である。アシスタントの手配、材料、湖のそばだから、当然機械類を動かすのに自動発電機もいる、ボートもいる、湖の中に作品を設置するのにはスキーバーダイバーもいる、みんな良くやつてゐるという感じだ。

昼になれば、昼食はピクニック、湖のそばに皆があつまつてくる。スバゲティーのときもあればサンドイッチのときもある。アシスタント、事務局の人々、作家達が自分自分のプランをみせあつたり、仕事のすみぐあいを話したり、英語・イタリア語・フランス語・ドイツ語・オランダ語がとびかう。僕にとつても毎朝問題が起つ



湖に無事“浮遊”した作品



作業に余念のない筆者

て、星に打合せをして解決するというぐあいでストレスがたまつていく。円錐の先端一㍍程、旋盤でつくるのは四日程かかると云う。全然出来てなかつたのだ。木工所へいつ自分でつくりはじめる。樹にしても僕のプランが変わって、樹を切り倒すのに市の許可がいるということで三日程かかるという。結局造園屋さんにして白樺の樹を買うことにする。コンクリートを流して、湖の中に樹をとめることはダメとかいろいろ問題がおこる。僕のアシスタント、マキシモは「イタリアは最初はダメダメといつても、あとはすべてOK！」だ」と云う。事実その様になつたのだけれど、最初の日、ドイツ人女性作家グローリアは、「ケイジ、滞在期間中に作品が出来るかどうか千マルク賭けようか」と云つていた。湖の中に十㍍程の白樺の樹をとめるのは造園屋さんが来てうまく設置してくれた。今まで何もなかつた白鳥が泳いでいた湖に樹が生えたわけである。そして、四㍍の長さの真赤な円錐を樹にもたれかかしてとめ、湖の上に沈んだ作品が出来たときは、一種の驚きがあった。今まであつた湖の風景が一変した。

湖の水、風によつて出来るさざ波、太陽の陽、遠くの緑、別荘、この湖の空気までも作品の一部としてとりこんだのだった。作品が出来たとき、この一週間程の間のトラブルはすべて吹き飛んでしまつた。湖の中で息づいている作品をみてホッとした。作品の題を Floating space for a tree. (浮遊の場—樹のため)とした。いろんな人が僕の作品が出来たのを聞きつけてみにきてくれた。ボートやカヌーで作品のまわりにやつてくる人もいた。みんなが素晴らしいと云つてくれ、僕もこんなにロケーションがいいところに作品がつくれてよかつたと思った。みんなが素晴らしく云つてくれ、僕もこんなにロケーションがいいところに作品がつくれてよかつたと思つた。

その二日後は一日どしゃ降りと、雷がつぎつぎに落ちた。あんなに多くの稻妻をみたのは生まれてはじめてだつた。湖の上の轟音と閃光はこの展覧会の前夜祭みたいなものだった。

巴里の美術情況

美術家
松谷 武判



戦後、経済成長がもたらした高度な発展国、日本。極東に位置する日本は今も西欧の人々には、神秘性を孕んだ國と映る様で、伝統と近代化が旨く保たれながら発展しているのが、大方興味の中心です。現代芸術もひと頃に比べて随分西欧に理解されて来ましたが、それでも、ホンダやソニーは知つても、日本製である事を知らない矛盾が生じ、文化輸出の少ない國柄、経済中心に動いている政治からすれば致し方がないことです。単身、日本を脱出し、当地、^{パリ}巴里で立派な仕事をしている芸術家、西欧では無名であつた舞踏山海塾が、レアールのフーラム野外広場で無料で演じ、関係者の目に留り、今では世界の国々から招待され、成功した例は他にも沢山あり、日本文化を我々独自の手で植え付けていきます。

伝統を大切に、教養を積んだ、所謂、インテリジャン達の住む巴里は、美術、音楽、映画、演劇に、全てを鑑賞していると一分とて自分の時間がない程、催し物の宝庫。美術のみに限つても、二百軒余りの現代美術の画廊が左岸と右岸に点在し、一ヵ月単位の企画展をやり、蒐集家を引きつけ經營が成り立つてゐるのですから、フランスの不思議の一つです。

フランス文化省がかなりの予算を芸術に当てているのもこの国の特徴。環境芸術運動では近頃、実行された現代彫刻、オブジェ等を市内に百体、地方に百体設置されて行くもので、総額数億フランの予算がミツテラン政府から出て注目されています。美しい公園や広場に現代彫刻が置かれ、彫刻家アルマンは、大きな丸時計を不規則に塔の様に積み重ね、オブジェ化し、二作目、旅行鞄（ブロンズ製）をこれも十m近く積み上げ、サン・ラザール駅前の両広場に設置。古い駅舎の建築との対比に個性的空間を創り出しています。他に、ルクサンブルー公園にはマンデス・フランス像（ベニヨー作）、マリニー公園にポンピドー像（デブレエ作）、チュイルリー公園にレオン・ブルム像（ガレル作）、政治家以外にはサルトル、カミュ、アラゴン、ブルースト、ヴァレリー等、彫刻家の提案にあり設置されていきます。

既に、長く継続されている文化省予算の一%を野外造形につかわれ、美術家にモニュメントを制作させ、国内を美化して行く運動は御存知のことと思われます。又、文化省は毎年多くの美術作品を蒐集し、地方文化局にも予算を配分、画廊を通して作家の作品を買い上げ、地方美



筆者と奥さんのバンホウテンさん（パリ11区のルユ・シャロン通りのアトリエにて）

的に定められ、永久滞在が認められます。このラ・メゾン・デュ・アーティスト・芸術家局に登録された者は文部省、パリ市が市内外に建設されている芸術家用アトリエに入居出来ることです。フランスでは市、公団のアパートが建設される際、一階には彫刻家用、最上階に画家用のアトリエを造る事を義務づけています。又、各区や郊外に最低、五〇畳から二百畳までの住居付アトリエ村が到所にあり、芸術家なら年齢、国籍を問わず、税金納入高と家族構成の大・小によって、それぞれの広さのアトリエに順次入居出来る仕組になっています。入れば永久に住め、私の知る日本人作家だけでも何十人と入居、快適に制作しています。作家によつては郊外だと足の便も悪く、画廊、批評家とのコンタクトに手間どるからと入居したがらない贅沢人も出る始末で、空いている所もあるとか、日本では考えられない事です。因みに、一人用アトリエの規模を書いてみますと（コンクリート平屋建アトリエ）制作場四〇畳、天井まで六m、天窓明り取りが二カ所、風呂場と洗面所にW・C、台所がアトリエに統いて横にあり、その上がテラス風二階で寝室兼居間、建物はセントラル・ヒーティングでお湯は自動的に出て、ガレージ付き、家賃は月、日本円で三万円少々です。これは一人用ですから、大きい所では数部屋とアトリエだけで百畳はゆうにあり、フランス政府は如何に芸術がその国に文化に大切であるかを知つてゐるからです。

モンパルナス（14区）アトリエのホールで開かれたケルーブ展

術館、文化センターに納め共存共栄を計っています。

フランスは芸術家に対する社会保障も充実してい

て、文化省の中にラ・メゾン・デュ・アーティスト（LA MAISON DES ARTISTES、芸術家局）が独立してあ

ります。国籍の差別なく芸術活動をフランスで行つてい

る者なら加入出来、収入申告高により、納税義務を負担金額により、健康保険、養老年金、家族保険等の納税額により、職業美術家として認め、フランス国民と同待遇となり（選挙権のみがないが）、職業美術家としてのカテゴリーに法

